

# 横須賀市平作川低地の 環境変遷と中世の開発について

Changes in the Environment of the Hirasakugawa River Lowlands in  
Yokosuka City and Development in the Middle Ages

中三川 昇

はじめに

① 平作川低地周辺地域の中世以前の遺跡と自然環境

② 平作川低地の中世遺跡と自然環境

③ 蓼原東遺跡を取り巻く環境変化と地震災害

まとめ

## [論文要旨]

中世都市鎌倉に隣接する三浦半島最大の沖積低地である平作川低地の中世遺跡を中心に、出土遺物や遺跡を取巻く環境変化、自然災害の痕跡などから、地域開発の様相の一端とその背景について考察した。平作川低地には縄文海進期に形成された古平作湾内の砂堆や沖積低地の発達に対応し、現平作川河口近くに形成された砂堆上に、概ね5世紀代から遺跡が形成され始める。6世紀代までは古墳などの墓域としての利用が主で、7世紀～8世紀中頃には貝塚を伴う小規模集落が出現するが比較的短期間で消滅し、遺構・遺物は希薄となる。12世紀後半に再び砂堆上に八幡神社遺跡や蓼原東遺跡などが出現し、概ね15世紀代まで継続する。両遺跡とも港湾的要素を持った三浦半島中部の東京湾岸における拠点的地域の一部で、相互補完的な関連を持った遺跡群であったと考えられるが、八幡神社遺跡の出土遺物は日常的な生活要素が希薄であるのに対し、蓼原東遺跡では多様な土器・陶磁器類とともに釣針や土錘などの漁具が出土し、15世紀には貝塚が形成され、近隣地に水田や畑の存在が想定されるなど生産活動の痕跡が顕著で、同一砂堆における場の利用形態の相違が窺われた。蓼原東遺跡では獲得された魚介類の一部が遺跡外に搬出されたと推察され、鎌倉市内で出土する海産物遺存体供給地の様相の一端が窺われた。蓼原東遺跡周辺地域の林相は縄文海進期の照葉樹林主体の林相から、平安時代にはスギ・アカガシ亜属主体の林相が出現し、中世にはニヨウマツ類主体の林相に変化しており、海産物同様中世都市鎌倉を支える用材や薪炭材などとして周辺地域の樹木が伐採された可能性が推察された。蓼原東遺跡は15世紀に地震災害を受けた後、短期間のうちに廃絶し、八幡神社遺跡でも遺構・遺物は希薄となるが、その要因の一つに周辺地域の樹木伐採などに起因する環境変化の影響が想定された。

## はじめに

中世都市鎌倉については、鎌倉旧市街地内での発掘調査の進展により多くの知見が得られるに至ってきたが、その後背地となり鎌倉に対する海産物や薪炭などの日常的な物資の供給地として、密接な関連があったかと予想される隣接地域の実態については、発掘調査事例も少なく、未だ判然としない点が多い。

本稿では中世都市鎌倉に隣接する三浦半島地域の過半部を占める神奈川県横須賀市にあって、縄文時代以来の環境変遷が一定程度把握され、かつ中世期の環境を具体的に考察し得る資料のある平作川低地の遺跡、中でも12世紀代から15世紀代までの遺構・遺物や15世紀代の貝塚などが発掘された<sup>(1)</sup> 蓼原東遺跡を主な対象として、都市鎌倉隣接地域における中世の地域開発の様相の一端と背景について考えてみた。



図1 関連遺跡位置図

## ①……………平作川低地周辺地域の中世以前の遺跡と自然環境

### 1 中世以前の遺跡

平作川低地周辺地域に遺跡が形成されるのは概ね縄文時代早期以降で、茅山貝塚<sup>(2)</sup>や吉井貝塚<sup>(3)</sup>、江戸坂貝塚<sup>(4)</sup>などの早期～後期の貝塚が、平作川低地に面した岬状の丘陵部に営まれるが、縄文時代晩期には久里浜湾南側の丘陵裾部付近で僅かに若干の土器片が出土するのみとなる<sup>(5)</sup>。弥生時代中期後半に再び茅山貝塚や吉井貝塚などに集落が出現し、古墳時代中期頃までは三足谷遺跡<sup>(6)</sup>、上吉井南遺跡<sup>(7)</sup>、神明



図2 平作川低地と周辺地域の主要遺跡分布図

谷戸遺跡<sup>(8)</sup>などの遺跡が丘陵地域内に営まれる。

古墳時代中期から後期に至ると平作川河口近くの砂堆上に八幡神社遺跡群<sup>(9)</sup>や夢原遺跡<sup>(10)</sup>などに古墳が築かれ、7世紀～8世紀中頃には貝塚を伴う小規模集落が夢原遺跡に出現するが短期間で廃絶し、以後砂堆上では遺構・遺物が希薄となり、大餅遺跡<sup>(11)</sup>を初め同時期の集落の大半は丘陵地帯に立地する。

以上のような変遷は、基本的には後述する縄文海進期に形成された古平作湾と、その後退過程に対応した在り方であったと考えられるが、9～10世紀代の砂堆上での遺構・遺物の希薄さは、局地的な環境変化<sup>(12)</sup>に起因する現象とも考えられている。

## 2 中世以前の自然環境

### 古地理の変遷

本稿で対象とする平作川低地は、三浦半島最大の河川である平作川<sup>(13)</sup>の下流域に当る地域である。平作川の沖積低地は、現況では河口部から上流約2.5km付近までの幅が約1km程で、表面高度は河口から上流3.5km付近までが標高3m以下と低平な沖積面となっている。また、河口近くには幅が最大400m程の久里浜付近の砂堆Iと、幅約200m程で現海岸線付近に位置する砂堆IIの2列の砂堆が現海岸線に平行する形で発達している。

平作川低地の最終氷期から現在までの古地理変遷については、試錐資料や路頭調査資料などに基づく幾つかの研究成果が発表されている<sup>(14)</sup>。これらの成果によると、最終氷期の平作川は現河口部で標高

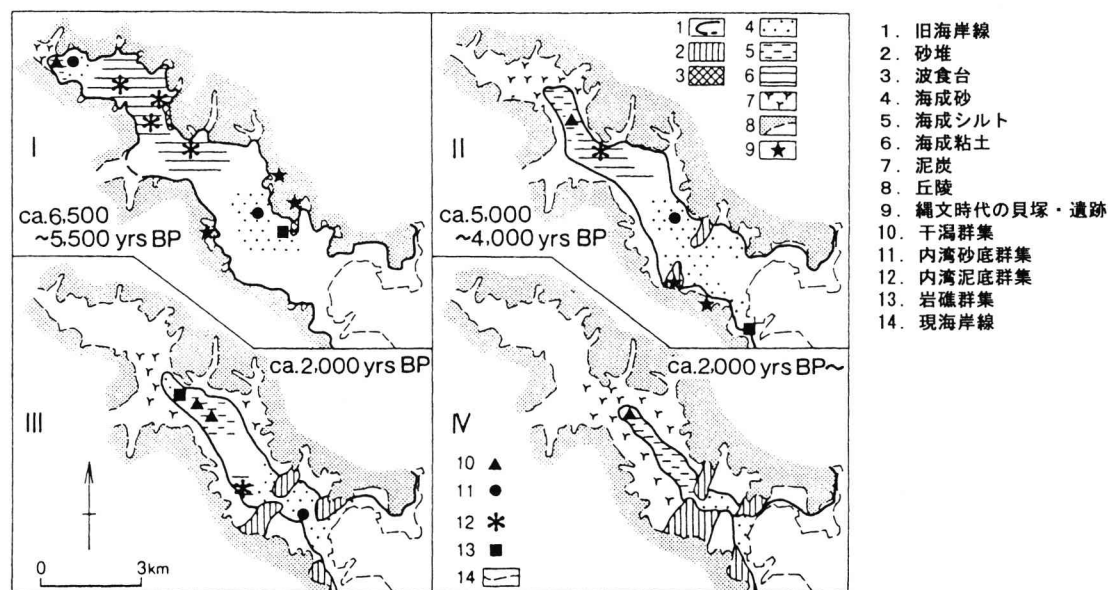


図3 平作川低地における完新世の古地理の変遷

ー50 mに及ぶ深い谷となっていたが、約9000年前頃に始まった縄文海進により古平作湾が形成され、縄文海進最盛期の約6500年前頃には海水面が現河口より約6 km上流付近まで達していたと推定されている。同時期には湾奥部の浅海域が干潟となりマガキ他の干潟群集が形成され、湾中央部の砂質底環境の水域にはアサリ他の内湾砂質群集が形成され、波食台の形成された地域にはツボミ他の岩礁群集が形成され、マダイ・クロダイなどの内湾性の魚類が回遊する環境であったと推定されている。以後は海退に転じ約4000～5000年前より砂堆Ⅰが形成され始め湾の閉塞が始まる。約2000年前頃には砂堆Ⅰがさらに発達し古平作湾を二分する形となり、砂堆Ⅰ背後の内湾は広い干潟域となり、現海岸線付近でも砂堆Ⅱが形成され始める。以後河口付近の砂堆はさらに発達するが、湾口を閉塞することはなく、現流路とほぼ同じ位置に細長い干潟域が残存し、万治3年（1660）に始まる新田開発により河口近くの一部を除くほぼ全域が陸地化したと想定されている。

なお、久里浜湾南岸の丘陵裾部付近には衣笠断層系の活断層が存在し、活断層の南側は継続的に隆起しており、海水面の変移とともに当地域の環境変化の要素の一つとなっている。<sup>(15)</sup>

### 植生の変遷

縄文時代以降の高木類を主とした植生の変遷を概観するが、平作川低地で縄文時代以来の植生変遷を窺える事例が少ないため、まずは三浦半島内で唯一縄文時代から古代までの植生変遷が考察された逗子市池子遺跡群<sup>(16)</sup>での様相をみてみることにする。

池子遺跡群での花粉分析結果によれば、<sup>14</sup>C年代（以下略、暦年代補正無し）で7,700 yrsBP～7,400 yrsBPの縄文海進初期頃にはナラ類他の落葉広葉樹に常緑広葉樹のカシ類他が少量見られる暖温帯性の落葉広葉樹林が存在し、5,000 yrsBP頃からアカガシ亜属を主とする照葉樹林が発達し始め、縄文晩期頃にはナラ類が減少し常緑性のカシ類・シイ類が増加し、陸地化した谷底低地に集落や水田

などが営まれる弥生時代中期も前代とほぼ同様な森林が存在したが、カシ類を中心に用材や薪炭材としての伐採が行われ、集落近辺の森林は二次林化が進行したと考えられている<sup>(17)</sup>。大型植物化石の分析結果では縄文時代晩期から平安時代までは基本的にコナラ属アカガシ亜属が優先する常緑広葉樹と落葉広葉樹・常緑針葉樹の混合林であったと想定されている<sup>(18)</sup>。木製品及び自然木樹種の分析結果では、弥生時代中期にはアカガシ亜属が多く利用され、古墳時代から平安時代にはアカガシ亜属の利用は減少しスギ・ヒノキ他の針葉樹類が活発に利用され、近世には新たにマツ属が箱・膳・下駄などの製品に使用され始め、この間に生じた植生変化により、近世には近隣の用材としては二次林性のマツ属しか選択できなくなった可能性が指摘されている<sup>(19)</sup>。ちなみに、鎌倉市永福寺での花粉化石の分析では12世紀末～13世紀末までは近隣にスギ林及び照葉樹林が存在したが、以後森林破壊が進行しマツ属が圧倒的に優先する環境に変化したと指摘されている<sup>(20)</sup>。

横須賀市内の事例では、東京湾に面した横須賀市役所地下の8,000～7,500 yrsBPの堆積物の花粉分析が行われ、シイ属の花粉化石が高率で出現することが確認され、久里浜湾南岸の丘陵裾部の谷戸内に位置する「入り自然貝層」では、3,000～50,000 yrsBPとされる自然貝層中の花粉分析が行われ、木本類ではシイ属が約60%と優先し、近隣にシイタブ林が存在したと想定されている<sup>(21)</sup>。また、三浦半島北部に位置する鉾切遺跡では4世紀頃の堆積層の花粉分析が行われ、アカガシ亜属とシイ属の花粉が優先し、近隣地にシイ・カシ類の照葉樹林が存在したと想定されている<sup>(22)</sup>。さらに、半島中部に位置する小荷谷戸遺跡では9世紀後半の井戸覆土の花粉分析・植物珪酸体分析が行われ、木本類ではスギ・アカガシ亜属が優先し、草本類ではイネ科・ヨモギ属などが優先しており、周辺地域は林分が少なく開けた草地主体の環境であったと想定されている<sup>(23)</sup>。これらの分析結果を池子遺跡群での分析結果と比較すると、シイ属が優先する時期が早い点で相違するが、以後の植生は基本的にはほぼ同様であったと考えられる<sup>(24)</sup>。

## ②……………平作川低地の中世遺跡と自然環境

### 1 中世遺跡の立地と概要

#### 概 観

中世の平作川低地は、既述のとおり古平作湾内に2列の砂堆が形成され、奥部に干潟状の内湾が広がる環境が想定されている。図4に網点で示した部分は17世紀に新田開発で陸地化した地域で、中世には内湾または干潟域であったと想定される地域である。当地域は治承4年(1180)の源頼朝挙兵に伴う「衣笠城」の合戦で敗退した三浦義澄以下三百余騎が安房に逃れた「栗濱の御崎」であり、古平作湾南岸の砂堆Ⅰには養老4年(720)創建とされる八幡神社が所在し、八幡神社遺跡群や蓼原東遺跡、蓼原遺跡などが12世紀後半～末頃に出現し、湾口部には寿永元年(1182)に源頼朝が神馬を奉獻した住吉社が所在する。この他、古平作湾奥部の北岸には三浦氏の城郭とされる「怒田城」跡があり、隣接地には字「舟倉」の地名が残る。このように、当地域は中世前期の三浦氏との密接な関連が窺われ、かつ港湾的性格をもった地域であったと推察される。

### 八幡神社遺跡群

八幡神社遺跡群は古平作湾を二分する標高3 m前後の砂堆Ⅰに立地する主に古墳群と中世の遺構群からなる遺跡で、古墳時代では中・後期の円墳3基などが発掘され、埴輪を伴う古墳の存在も予想されている。

中世の遺構としては12世紀後半～15世紀代までの掘立柱建物址、竪穴状遺構、土坑柱穴群などが発掘され、手づくねかわらけを含む同時期のかわらけや、常滑編年の1b期に該当するランダム押印<sup>(25)</sup>の施された甕を含む常滑・渥美・古瀬戸などの陶器類や龍泉窯系青磁碗などが出土している。

八幡神社遺跡群出土の遺物を後述する蓼原東遺跡の出土遺物と比較すると、蓼原東遺跡で多量に出土した漁具類や調理具である鉢類の出土量は極めて少なく、出土遺物に占めるかわらけの比率が高いなど、生産や日常生活に関わる遺物が僅少な点が特徴的であり、同遺跡群は八幡神社の境内や、それに隣接した屋敷地などであったかと推察され<sup>(26)</sup>る。

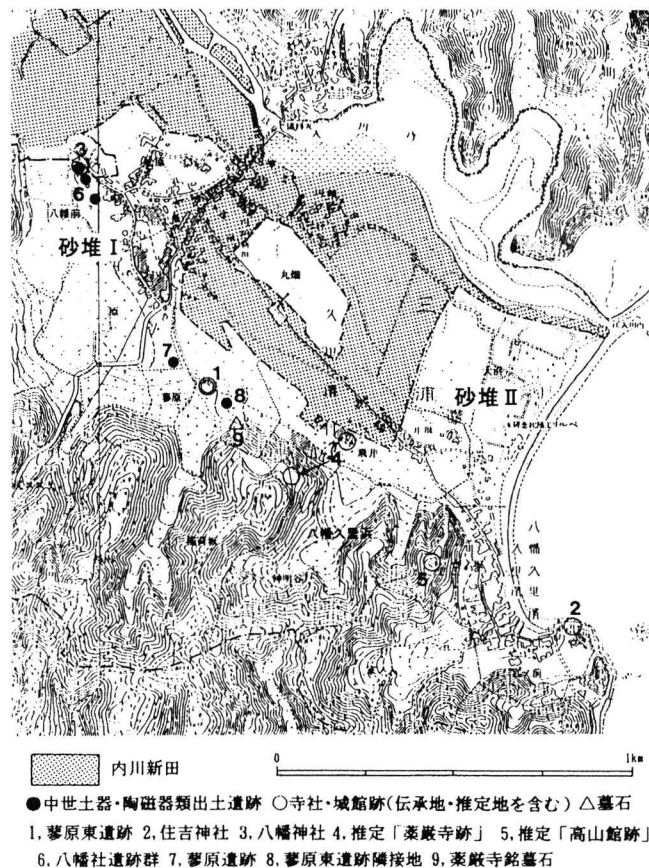


図4 平作川低地の中世遺跡分布図

### 蓼原東遺跡

蓼原東遺跡は砂堆Ⅰ東南部の低湿地帯に面した標高2 mほどの砂堆に立地する遺跡で、453 m<sup>2</sup>と狭い調査面積ながら、12世紀末頃から15世紀代までの掘立柱建物址・土坑・柱穴などと、15世紀に形成された貝塚などが発掘された。

本遺跡の貝塚は陸地化した砂堆と低湿地帯との境界部分に形成されたもので、下部貝層群と上部貝層群とに分離され、貝塚に接する低湿地帯には下部貝層群に連なる水中拡散貝層が認められた。

この貝塚が形成された時期には、貝塚の南側に2棟の掘立柱建物址が相次いで築かれ、この近辺からは管状土錘や鉄製釣針他の鉄製品などが集中して出土し、貝塚と建物址との中間地域からは碗形滓を含む鉄滓が出土し、貝層中から鞆の羽口も出土するなど、15世紀代にはSB01・02などの掘立柱建物址を中心に鉄製漁具の生産を行いながら、漁労・採貝活動など活発に行われたものと推察される。

主な出土遺物は12世紀末頃から15世紀代までの貿易陶磁を含む陶磁器類、かわらけ他の土器類、鉄製釣針・ヤス先や組合式釣針柄、管状土錘などの漁労具、フイゴ羽口、鉄滓、開元通宝～政和通宝までの中国銭などで、貝塚からはイボキサゴ・アサリ・ハマグリなどの内湾砂泥底種の貝類やサザエなどの軟体動物遺存体が多量に出土したが、ハマグリやサザエ蓋などの大きさには自家消費的な廃棄の結果とするには不自然な偏在性が認められ、また出土した漁労具に対応する魚骨の出土量も極めて

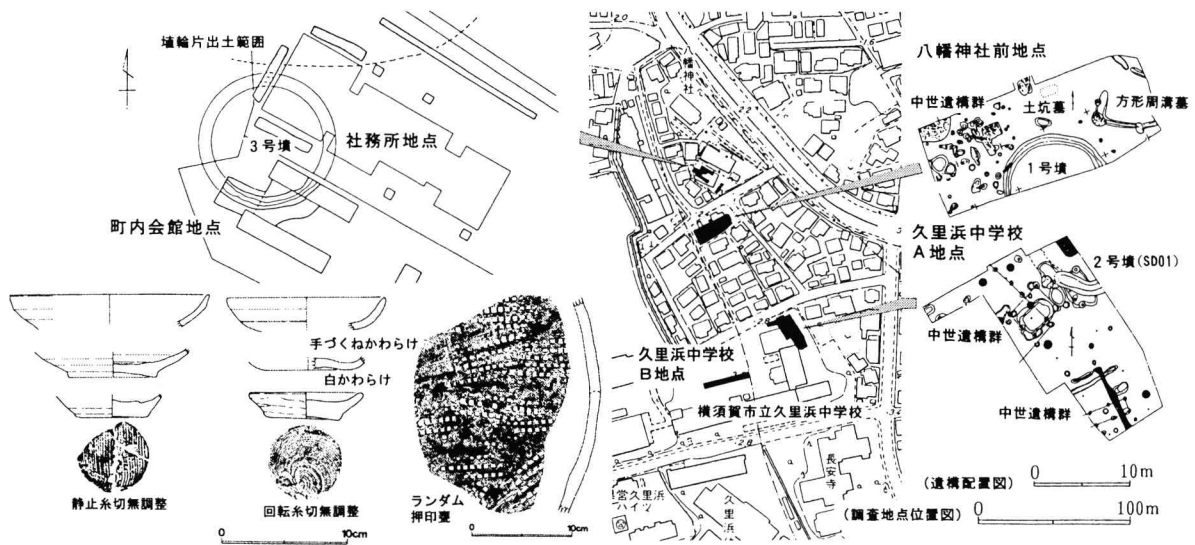


図5 八幡神社遺跡群の調査地点と主な出土遺物

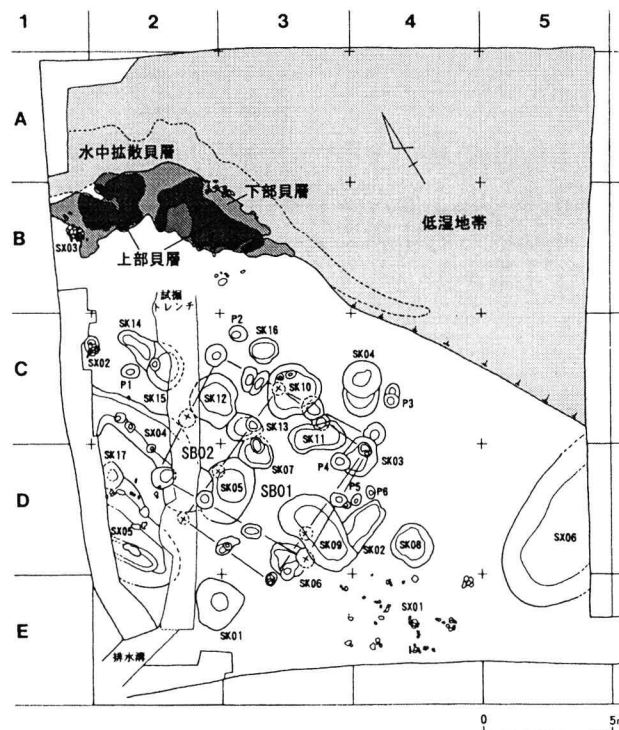


図6 蓼原東遺跡の遺構分布図







の一部分で、15 世紀代を中心に活発な漁労・採貝活動をあわせて行った遺跡であったと推察される。<sup>(29)</sup>

### ③…………… 蓼原東遺跡を取り巻く環境変化と地震災害

#### 1 環境変化

蓼原東遺跡では遺跡周辺の古環境復元を目的として、貝層及び隣接するシルト質堆積層を対象に花粉分析・植物珪酸体分析・珪藻分析などが行われている。<sup>(30)</sup>

花粉分析や植物珪酸体の分析結果では、下部貝層群 12 層と上位のシルト質堆積物群第 VI 層ではニヨウマツ類主体のマツ属が優先し、イネ科やカヤツリクサ科の草本花粉が高率を占め、遺跡近辺は開けた場所で、近隣にニヨウマツ類主体の植生が存在し、サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの水田雑草類と、サンショウモ・アカウキクサ属などの水生植物も検出され、近隣地にこれらの水生植物が生息した水湿地帯が存在したと推定されている。また、少量ではあるがソバ属も検出されている。

次に珪藻分析の結果では、全般的に淡水性の珪藻化石が 80% 以上を占めるが、貝層中と下位のシルト質層群では貝層の影響のためか塩分濃度の高い水域に生息する珪藻化石が多く、シルト質層は塩類の集積し易い富栄養化淡水域で河川等の流水の影響を受けた水成堆積層であったと推定されている。また、上部貝層下の II～V 層は比較的海水生種が多く、下部貝層を破壊した地震に起因する津波の影響かと推察されている。さらに上部貝層群上の II 層は流水性の珪藻が多く、流水の影響を受け堆積した層と考えられ、貝塚廃絶時の前後で遺跡を取り巻く環境が大きく変化したことが窺われる。

なお、貝層出土の軟体動物遺存体は内湾砂泥底種であるイボキサゴ・アサリ・ハマグリなどが約 90% を占めるが、少量ながらも淡水性種のマルタニシも出土しており、水田雑草の花粉の存在からも近隣地に水田が存在したと考えられる。

以上のような点から、15 世紀以前の蓼原東遺跡周辺地域は、遺跡の立地する砂堆上は草本類が卓越した開けた土地で、近隣の丘陵部などにニヨウマツ類主体の植生が存在し、近隣に小規模ながらも水田や畑が存在し、遺跡の北側には砂泥底質の内湾や干潟が広がる環境であったと推察される。

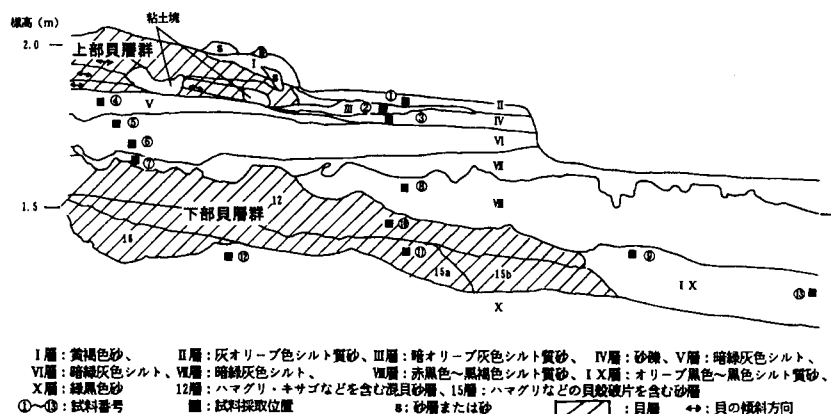


図 8 蓼原東遺跡珪藻・花粉分析資料採取位置図



表 1 蓼原東遺跡の花粉分析結果

種 類 (Taxa)	試料番号	②	⑤	⑩
木 本 花 粉				
モミ属	-	3	1	
ツガ属	-	22	7	
トウヒ属	-	1	-	
マツ属	1	66	134	
スギ属	-	-	1	
イナガヤ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1	-	
サウグ属	-	-	1	
クルミ属	-	-	1	
クマシダ属-アサダ属	-	-	2	
カバノキ属	-	-	1	
ハンノキ属	-	1	2	
ブナ属	-	2	1	
コナラ属	-	12	23	
コナラ属-アカガシ属	-	3	10	
クリ属-シイノキ属	-	1	1	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	2	
ブドウ属	-	-	1	
ツタ属	-	-	1	
ウコギ科	-	1	5	
イボタノキ属	-	-	2	
スイカズラ属	-	1	-	
草 本 花 粉				
サジオモダカ属	-	-	1	
オモダカ属	-	-	3	
イネ科	-	175	725	
カヤツリグサ科	-	127	116	
イボクサ属	-	-	1	
ミズアオイ属	-	-	2	
クワ科	-	-	3	
ギシギシ属	-	-	1	
サナエタ節-ウナギツカミ節	-	6	1	
タデ属	-	1	-	
ソバ属	-	-	1	
アカザ科	-	2	24	
ナデシコ科	-	1	7	
カラマツソウ属	-	1	-	
アブラナ科	-	1	-	
バラ科	-	-	2	
マメ科	-	-	1	
アリノトウグサ属	-	-	1	
セリ科	-	-	1	
ヨモギ属	-	7	20	
他のキク亜科	-	5	3	
タンポポ科	-	4	7	
不明花粉	1	1	3	
シダ 類 胞 子				
サンショウモ	-	1	3	
アカウキクサ属	-	-	2	
他のシダ類胞子	1	193	225	
合 計				
木 本 花 粉	1	114	196	
草 本 花 粉	0	330	920	
シ ダ 類 胞 子	1	1	3	
不 明 花 粉	1	194	230	
総 計	3	639	1349	

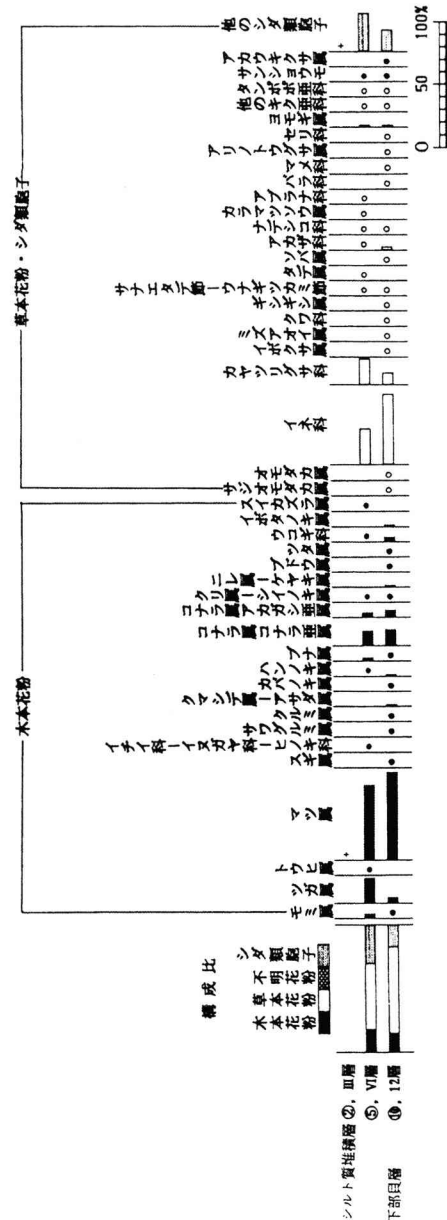


図 10 蓼原東遺跡における花粉化石の層位分布

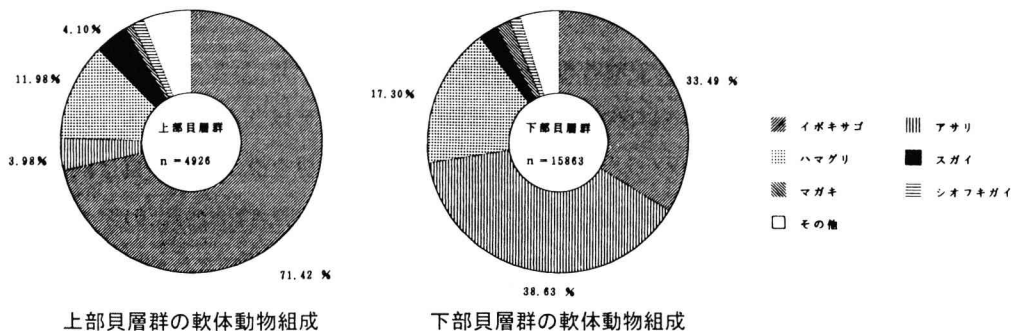


図 11 蓼原東遺跡貝塚の軟体動物組成グラフ

## 2 地震災害痕

蓼原東遺跡では中世の貝塚形成中と遺跡廃絶後に地震災害を受けている。前者は出土遺物から明応7年8月25日（西暦1498年9月20日）に発生した「明応東海地震」またはそれ以前の地震によるもので、15世紀に形成された貝塚中に地割れを生じさせるとともに、砂堆上に幾つかの小規模な噴砂痕を残している。後者は遺跡廃絶後の堆積層を貫く砂脈を多数発生させた地震であり、ここでは15世紀代に生じた地震災害のみ取り上げる。

明応7年以前と考えられる地震は、貝塚の下部貝層群中に地割れを生じさせているが、この地割れは同時進行的に堆積した砂層（V層）とシルト質層群（VI層）とが指交構造を呈して交わる弱線で発生したもので、最大幅53cm、深さ59cm以上、長さ約20m以上の規模を持つ。貝塚部分ではVc層とVI層・水中拡散貝層群との境で発生し、下部貝層の一部が陥没している。この地割れ層の

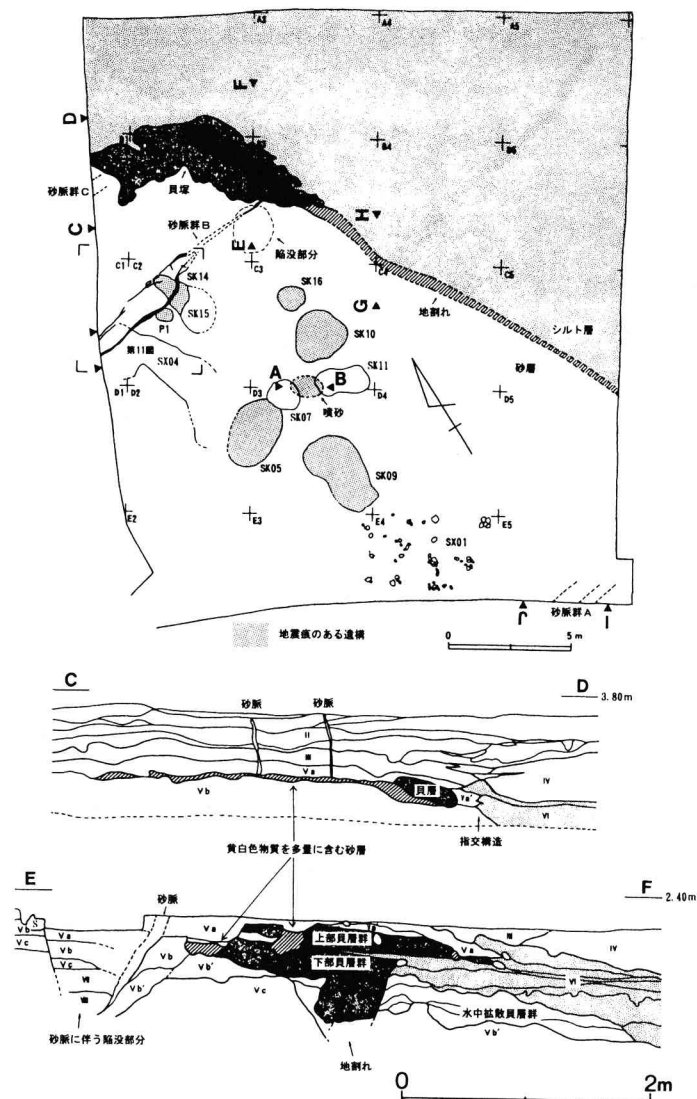


図12 蓼原東遺跡の地割れ・砂脈等の分布と断面

直上には混貝砂シルト層や泥岩小礫の礫層などの薄層が下位層とは不整合に堆積しており、地震に伴う津波の痕跡かと推察されている。以後、小規模な上部貝層群が形成されるものの、短期間のうちに遺跡は廃絶し、低湿地部に砂礫層が堆積した後、流水などに伴い堆積したと考えられる厚さ 60 cm 前後のシルト質土層・砂礫層・砂層等の互層（II～V 層）に厚く覆われ人為的な活動の痕跡は認められなくなり、この間に周辺地域を含め大きな環境変化があったことを示唆している。

## まとめ

平作川低地の中世遺跡を中心に、出土遺物や古地理、古環境の変化などから当地域における中世の開発や災害の一端について考えてみた。平作川低地は縄文海進期に形成された古平作湾の後退と砂堆・沖積低地などの形成過程に応じて、古墳時代以降に砂堆主体の低地に遺跡が丘陵上から進出してくるが、日常生活の場として本格的に利用され始めるのは 12 世紀後半頃からで、古平作湾南岸の砂堆上に八幡神社遺跡群や蓼原遺跡、蓼原東遺跡などの遺跡が形成され、概ね 15 世紀代まで土地利用がなされている。

これらの砂堆上に立地する中世遺跡の性格については判然としない点も多いが、八幡神社遺跡群は日常的な生活要素がやや希薄で神社境内と隣接する屋敷地の一部かと想定され、蓼原東遺跡については 15 世紀代には水田や畑作なども含めた活発な生産活動が行われた遺跡であったと考えられた。このように、両遺跡は一見対照的な様相を呈しているが、基本的には東京湾内の交通・物流など扼する港湾的性格を持った三浦半島東京湾岸地域での拠点的な場の一部として出現した遺跡であると考えられ、その出現の背景には初期の鎌倉幕府内で有力な勢力であった三浦氏の存在があったと推察され、両遺跡間に認められる出土遺物の様相の相違は、同一砂堆上に立地する遺跡群の中での場としての機能分化を示すもので、本来は相互補完的な性格を有する一体の遺跡群であったと推察されよう。

15 世紀代の蓼原遺跡では釣漁・刺突漁・網漁などの漁労や貝類の採集活動、水田や畑の存在も想定されるなど、平作川低地の砂堆上に中世遺跡が出現して以来、船手衆として海上交通の拠点を担ったと想定される人々の日常的な生業の様相が示されている。また、同遺跡で獲得された魚介類の一部は選択的に遺跡外に搬出されたと推察され、時期的には中世都市鎌倉の盛期とは重ならないものの、鎌倉市内の中世遺跡から多量に出土する海産物供給地の具体的様相の一端が窺われた。

平作川低地周辺地域の林相は縄文海進期のシイタブ林等の照葉樹林を主体とした林相から、平安時代にはスギ・アカガシ亜属が優先する林層に変化すると推察されたが、中世の蓼原東遺跡周辺地域は低地部が草本類の優先する開けた場所で、近接する丘陵部は二次林性のニヨウマツ類主体の林相を呈していたと推察された。鎌倉市永福寺跡や逗子市池子遺跡群で示された植生変遷同様、平作川低地周辺地域でも中世期に丘陵部の山林伐採が盛んに行われたことを示唆する現象と考えられ、伐採された樹木の一部は海産物同様に中世都市鎌倉を支える各種用材あるいは薪炭材などとして流通したと考えられよう。蓼原東遺跡は廃絶後、洪水ほかの流水に伴い形成された厚い砂礫層やシルト質層などの互層によって短期間のうちに埋没している。この事象は山林伐採などの影響も背景にあると考えられるが、基本的には環境変化による当地域の港湾的機能低下を示唆している。このような環境変化と後北条氏による地域支配再編などにより 16 世紀代以降三浦半島東岸中部の拠点の港湾機能はより北方

の浦賀地域に移動したと考えられる。

以上、平作川低地の中世遺跡を主な対象として、同地域における中世の開発と環境変化の一端について考えてみたが、当時三浦半島では中心的地域であったと考えられる平作川の中・上流域や支流などについては発掘調査事例が皆無に近く触れることができなかった。この地域は鎌倉に近接する逗子市池子遺跡群と本稿で対象とした平作川下流域との中間地でもあり、今後これらの地域での発掘調査事例や自然科学的な分析事例が増加すれば、中世都市鎌倉に隣接する三浦半島地域の開発と環境変化の実態はより鮮明になるものと思われる。なお本稿は平成12年7月2日に逗子市で行われた研究会での発表内容をまとめたもので、研究会の方々からは多くのご教示を得た。また本稿を記すにあたっては齋木秀雄、中野晴久、野内秀明、渡辺直哉氏らの各氏からご教示・ご協力を得た。末尾ながら記して感謝の意を表したい。

## 註

(1) — 横須賀市教育委員会 1995『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集

詳細は後述。

(2) — 縄文時代早期茅山式土器の標識遺跡。縄文時代早期の斜面貝塚と前期の住居址内貝塚が調査され、弥生時代中期～古墳時代中期の竪穴住居址などが調査されている。

(3) — 縄文時代早期～後期の斜面貝塚が2カ所と、縄文時代前期と弥生時代後期の竪穴住居址、中世の空堀跡などが調査されている。中世の怒田城跡伝承地。

(4) — 縄文時代早期～後期の斜面貝塚の一部が調査され、丘陵上には弥生時代後期～古代の土器片なども散布する。

(5) — 後述する神明谷戸遺跡や蓼原遺跡で縄文時代晩期の土器片が若干出土している。

(6) — 横須賀市教育委員会 1987『蓼原』横須賀市文化財調査報告書 第13集(第1分冊)

蓼原遺跡は平作川低地の海拔2mほどの砂堆上に立地し、6世紀中頃の埴輪を伴う帆立貝形前方後円墳1基(蓼原古墳)と古墳時代後期～奈良時代にかけての竪穴住居址や周溝内の貝塚などが調査された。少量ながら縄文晩期の土器片や中世のかわらけなども出土した。

(7) — 横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団 1997『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ・Ⅱ』

三足谷遺跡は谷戸に面した丘陵斜面部に立地し、弥生時代後期の集落跡と方形周溝墓が調査された。

(8) — 横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団 1997『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ・Ⅱ』

上吉井南遺跡は丘陵内の谷戸状の緩斜面地に立地し、弥生時代後期～古墳時代前期と古墳時代後期～平安時代

の集落跡、中世の土坑墓などが調査された。本遺跡の北方には奈良時代を中心とした集落跡が調査された上吉井北遺跡が所在した。

(9) — 横須賀市教育委員会 1987『神明谷戸』横須賀市文化財調査報告書 第13集(第2分冊)、横須賀市教育委員会 1991『神明谷戸遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書 第22集

神明谷戸遺跡は平作川低地に面した谷戸内と斜面部に立地し、古墳時代前期集落と方形周溝墓、古墳時代後期～平安時代の集落跡などが調査され、若干ながら縄文時代晩期の土器片も出土した。

(10) — 横須賀市教育委員会 1991『八幡神社遺跡群』横須賀市文化財調査報告書 第21集、横須賀市教育委員会 1997『八幡神社遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書 第31集、横須賀市教育委員会 1999「5. 八幡神社遺跡(248)」『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅶ』横須賀市文化財調査報告書 第33集

詳細は後述。

(11) — 横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団 1997『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ・Ⅱ』

大餅遺跡は平作川低地北岸の丘陵斜面部に立地し、古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡が調査された。同遺跡の立地する丘陵上では縄文時代早期の集落跡が調査された大塚台遺跡と古墳時代後期の前方後円墳・円墳各3基からなる大塚古墳群が調査されている。

(12) — 横須賀市教育委員会 1987『蓼原』横須賀市文化財調査報告書 第13集(第1分冊)

蓼原古墳は標高2m前後の砂堆上に立地する古墳であるが、奈良時代の集落廃絶後に海水の冠水を受け、波蝕などのため墳丘部を喪失したと考えられており、奈良時

代以後に局地的な沈降現象が発生したものと思われるが、同様な現象が古平作湾に形成された砂堆一帯に生じた可能性も考えられる。

(13) — 横須賀市東部を流れ、東京外湾に注ぐ流域面積 26.8 km<sup>2</sup>、本流延長約 8 km の平作川は、三浦半島内では最も広い沖積低地を発達させた河川である。

(14) — 太田陽子・澤真澄・蟹江康光 1988「第四章 地形」『横須賀市史』(上巻)横須賀市、澤真澄・澤祥・松島義章 1988「三浦半島平作川の古地理」『神奈川の自然と文化』板倉退蔵先生退官記念論文集、澤真澄・澤祥・松島義章 1994「三浦半島平作川低地の完新世の古地理変遷」『第四紀研究』Vol. 33 No. 2 日本第四紀学会など

(15) — 横須賀市 2000『横須賀の活断層』

(16) — 財団法人かながわ考古学財団 1999『池子遺跡群X 第4分冊 別編・自然科学分析編』

(17) — 清水丈太 1999「第二章 第4節 花粉化石群からみた池子遺跡群とその周辺域の植生史」『池子遺跡群X 第4分冊 別編・自然科学分析編』財団法人かながわ考古学財団

(18) — 百原新・久保田礼・那須浩郎 1999「第二章 第5節 池子遺跡群の大型植物化石群」『池子遺跡群X 第4分冊 別編・自然科学分析編』財団法人かながわ考古学財団

(19) — 鈴木三男・能城修一 1999「第二章 第7節 池子遺跡群出土の木製品および自然木の樹種」『池子遺跡群X 第4分冊 別編・自然科学分析編』財団法人かながわ考古学財団

(20) — 鈴木茂・吉川昌伸 1994「鎌倉市永福寺跡における鎌倉時代の植生変遷」『植生史研究2』

(21) — 蟹江康光・松島義章・鹿島薫・大森雄治・小島久美子 1985「横須賀市役所地下における完新統の古生物と年代」『横須賀市博物館研究報告(自然科学)』33

(22) — パリノ・サーヴェイ株式会社 1988「入自然貝層の花粉分析」『伝福寺裏遺跡』横須賀市文化財調査報告書 第16集

(23) — パリノ・サーヴェイ株式会社 1986「付編(1) なたぎり遺跡資料 花粉分析および材・種子同定報告」『鉾切遺跡』横須賀市文化財調査報告書 第12集

(24) — パリノ・サーヴェイ株式会社 1994「付編 小荷谷遺跡における自然科学分析調査」『小荷谷遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第3集

(25) — 赤羽一郎・中野晴久 1995「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』小学館

同編年1b期(1130~1150年)の甕の出土事例は神奈川県内では八幡神社遺跡群のみであり、初期の常滑・渥

美焼製品の流通経路を考える上で貴重な資料である。なお、同資料については常滑市民俗資料館の中野晴久氏に実見していただき、常滑・渥美のいずれかは判断しがたいが、赤羽・中野編年1b期の製品であることを確認していただいた。

(26) — 八幡神社遺跡群での調査地点での報告書に図示された、かわらけとその他の土器・陶磁器類の点数は以下のとおりである。社務所地点：かわらけ25点・その他0点、町内会館地点：かわらけ16点・その他0点、八幡神社前地点：かわらけ37点・その他9点(ランダム押印甕を含む)、久里浜中学校地点：かわらけ28点・その他10点(他に時期不明管状土鍾4点)。総破片点による比較ではないため、概略の様相が窺えるに過ぎないが、遺跡群北側にある八幡神社近辺の調査区では中世の遺物としてはほぼかわらけのみが出土し、同神社より離れた調査地点ではかわらけ以外の器種も出土するが漁具類は少なく、清浄な場としての神社境内と隣接する屋敷地といった土地利用がなされていた可能性が考えられる。

(27) — 野内秀明 1995「第七章 第2節 漁具について」・「第七章 第3節 貝塚について」『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集

出土した漁具類から組合式釣針=擬似針でカツオ、有あぐの大型釣針でサメ・マグロ、小~中型の無あぐの釣針を用いた延縄漁でアジ・サバなどが漁獲され、多様な管状土鍾による網漁やヤスによる漁労が行われていたと想定され、貝塚からはドチザメ・メジロザメの一種、ガンギエイ目の一種、カツオ、サバ、クジラ、ニホンアシカなどが出土したが、量的には極めて僅かであった。また、貝塚から出土したハマグリ・サザエなどの大きさが、商品として流通し中世都市鎌倉で消費されたものと比べ相対的に小型のもので占められていることなどから、獲得された魚貝類の多くが選択的に遺跡外に供給されていた可能性が指摘されている。

(28) — 中三川昇 1999「三浦半島における中世前期の貿易陶磁について」『貿易陶磁研究集会 鎌倉大会資料集 一相模国・鎌倉市街地における中世前期の貿易陶磁の出土様相一』貿易陶磁研究会・鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所

(29) — 中三川昇 1995「第七章 第5節 まとめ」『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集

(30) — パリノ・サーヴェイ株式会社 1995「付編 蓼原東遺跡の貝塚の古環境復元」『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集

(31) — 中三川昇 1995「第二章 第2節 地震痕」『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集



貝層を破壊した地割れ中出土のかわらけや、他の出土遺物の様相及び、地震発生後に津波被害を受けた可能性が高いことなどから、近隣の鎌倉での津波災害が記録されている明応東海地震を想定したが、現在では出土遺物に瀬戸・美濃系の大窯製品が皆無である点などから、さらに遡る時期の地震であった可能性があると考えているが、特定困難なため本稿では報告書記載のままとする。

(32) — 平作川上流域の横須賀市公郷地域には7世紀末頃に創建されたと考えられる宋元寺（現曹源寺）が所在し、近隣地に古代律令制化の御浦郡衙が所在した可能性が高いと目されており、平作川支流の大矢部川流域は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての三浦氏の本貫地であったと考えられている。

#### 挿図・表出典一覧

図1・図2：今回作成

図3：澤真澄・澤祥・松島義章 1994「三浦半島平作川低地の完新世の古地理変遷」『第四紀研究』Vol. 33 No. 2 より一部改変して掲載

図4・6～12, 第1表：横須賀市教育委員会 1995『蓼原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書 第5集より一部改変して掲載または作成

図5：横須賀市教育委員会 1991『八幡神社遺跡群』横須賀市文化財調査報告書 第21集, 横須賀市教育委員会 1999「5. 八幡神社遺跡(248)」『埋蔵文化財発掘調査概報集 VII』横須賀市文化財調査報告書 第33集より作成

(横須賀市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2002年6月3日受理, 2003年7月18日審査終了)

---

## **Changes in the Environment of the Hirasakugawa River Lowlands in Yokosuka City and Development in the Middle Ages**

NAKAMIKAWA Noboru

An investigation of aspects of development and background factors has been made of archaeological sites dating from the Middle Ages situated in the lowlands of the Hirasakugawa River in Yokosuka City, Kanagawa, Japan that neighbors the medieval city of Kamakura, using excavated relics, environmental changes and traces of natural disasters. While there are remains dating from around the fifth century on the sandbanks formed as a result of the recession of the former Hirasaku Bay that was formed in the Hirasakugawa lowlands as a result of the Jomon transgression, sandbanks were not used on any sizeable scale as a space in which to conduct everyday life until after the second half of the twelfth century. Remains such as the Hachiman Jinja Shrine sites and the Tadehara-higashi archaeological site have been discovered on the sandbanks, and in general continue up to the fifteenth century. Both sites are considered to have been part of central locations in the central part of the Miura Peninsula which had port-like aspects and are thought to be the remains of a series of places that had a mutually complementary relationship. However, whereas very few remains excavated from the Hachiman Jinja Shrine site have elements related to daily life, many kinds of earthenware and ceramic ware as well as fishing implements such as hooks and anchors have been excavated from the Tadehara-higashi site. With the creation of a shell midden in the fifteenth century and the assumption of the existence of wet rice paddies and fields in neighboring areas, there are striking traces of productive activity, all of which suggest differences in the way in which places on the same sandbanks were used. It is assumed that some of the various kinds of fishing implements obtained from the Tadehara-higashi site were selectively transported outside the area, suggesting that it may have been one area that supplied marine products whose remains have been excavated from medieval sites within Kamakura City. The forest in the region adjacent to the Tadehara-higashi site changed from being mainly a laurel forest during the period of the Jomon transgression to becoming a forest of cedar and sub genus Japanese evergreen oak during the Heian Period, later changing into a forest consisting mainly of diploxylon-type pines during the Middle Ages. Thus, as with marine products, we may conjecture that trees in the regions near the Hirasakugawa River lowlands were felled in large quantities to supply wood, firewood and charcoal to support the medieval city of Kamakura. The Tadehara-higashi site became extinct in a short period of time following earthquake damage in the fifteenth century and remains and relics from the Hachiman Jinja Shrine site dating after this period are also very rare. We may conclude that one reason for this was the effect of environmental changes caused by the felling of trees in the surrounding area.

---